広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	スナップ
Author(s)	児童の言語生態研究会,
Citation	児童の言語生態研究 , 15 : 103 - 105
Issue Date	1997-01-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045182
Right	
Relation	

スナップ

スナップ1 今回は子どものイメージの世界のスナップを集めてみた。

中川節子他

●ぼくにきこえる変なことば

☆　2年生の補教にいったときのことである。あたりを歩きまわっている子がいる。授業の最後に読書をと、本を読んでいると、本と私の間にその子がわりこんできて、私が本を読んでいるあいまに私のおっぱいをさわる。私は本を読みながら、

「おっぱいさわるんじゃない。」と数回言った。

「……とクマさんはいった」

「おっぱいさわるんじゃない」（声を変えて）

「そして、さっちゃんは……」

という具合に。

しかし子どもたちは私のこのさしはさんだことばに全く反応せず、何事もなかったように本のお話をきいている。ははん、これは、いちいちこの子に反応しないようにきちんとしつけられているんだな、と感心してその時間の補教は終わった。いつものように家に帰り、夕食のときこの話を実演してみせ息子に言うと、

「おかあさん、なんでいちいちオバサンジャナイ！ってことわるの？」と言い、

「あ……先生だからか。」

と妙に納得している。

なんと息子には「おっぱいさわるんじゃない」が「オバサンじゃない」ときこえていたのである。

きっと、あの2年生にも、まさか先生はそうは言わないと思い、「オバサンじゃない」ときこえたいたのかもしれない。

（息子・4年男）

☆　パンツ一ちょでブンガクザンマイというキャッチフレーズの出版社の本を宣伝カバーを見て即、

「パンツ一ちょでジブンガクサイ」

（4年男）

●イメージと記憶

☆　ジャジャジャジャーンと運命の曲の指揮のまねをしたとたん、私のことばと体が止まった。巨大なクモを発見したのである。

それ以来、子どもたちはこのジャジャジャジャーンを聞くたびに、すぐ巨大なクモの話をする。

（2年男）

●あの世からの道すじ

☆　母が死に、家を売り新しい家にひっこしをして初めてのお盆。迎え火の準備をしながら、子どもが真剣な顔をして言う。

「お母さん、こまったね。だっておばあちゃんとおじいちゃん、くる道わからなくなっちゃうねぇ。」

（3年男）

☆　上原先生がこの四月に他界されたので、今年のお盆は先生も一緒にお迎えしようと迎え火をした。

「お母さん、先生も本当に来るの？　でも乗る馬がないよ。おじいちゃん、おばあちゃんで、ナスとキュウリはおわっちゃうから」

〈でもたましいだから大丈夫よ。ほら、あっちから〉

「そうかなぁ……でも、ほんとうにあっちから来るみたい」

その時、西の方に夕日の光がさした。（5年男）

●うちんち・

☆　家を売ってしまってからも、まだ息子には、そ

のことがわからない。
「おかあさん、大丈夫だよ。うちんち、まだ、ちゃんとあったよ。」
と、毎日見に行って安心している。
（2年男）

☆　家がとりこわされ、なくなり、さら地になり、そこに草が生えてきた。
「お母さん、うちなくなったけど、はらっぱになっていたよ。だからぼく、うちんちのはらっぱで、○君と一緒に遊んだよ。」
（2年男）

●イメージタンク

☆　夏休みのことをひとりずつ話をさせた。中休みを一回とると、次に発表する子が私のところにとんできて、
「先生、ぼくね、みんなのはなしきいていたらね。いっぱいいっぱいいろんなことでてきちゃってね。こまっちゃった。おっぱらってもどんどんでてくるんだよ。」
（1年男）
（以上、町田第四小教諭　中川節子報告）

●夢はもうひとつの世界

☆　「お母さん、きのうさみしかった。だって、ゆめみなかったんだもん。」
（5才女）
（堀江久子氏報告）

●なに、おもってんの？

●　うっとりしている夢見心地のNちゃん。
「うーん、もう」と柱にキスをしている。
（3年女）
（日野南平小教諭　小林照子氏報告）

スナップ2

ある保育者の手紙

上原輝男・瀬底ノリ子

一

先生、私たちのような仕事にたずさわる者は、みんなそうなのでしょうか。

子どもたちの姿が見えなくなると、引いて行った波が押し返して来るように、子どもたちの声が、まるで潮騒を聞くように、私の耳に届いて来ます。

昨日は肌寒い日でしたのに、今日は暑い日でした。英子ちゃんは、もう早速靴下を脱ぎ始めます。

〝せんせい、わたしのあしに、さわって。あついでしょ〟

おませの英子ちゃんですけれど、それは決して言い訳だったり、自己顕示であったりはしないのです。誰よりも早く気温を足に感じたから、そうするのにちがいないのです。

こんな日には、積木のかげに、椅子の下に置き忘れられた小さな上履きが、子どもたちの脱けがらのように残るのです。私もはだしが大好きです。寒がりなのですが、お部屋の中をペタペタ、はだして歩きまわるのは、きっと足の裏の感触を楽しんでいるのでしょう。ですから私もいつまでたっても子どもなのです。

感触を楽しむという言い方をしましたけれど、決して人間が感触を持っているのだと考えたことはありません。人間の感触は、自然が与えてくれるのだと思っています。与える、与えられるというより、交わる方がよいかもしません。子どもの立場では、子ども自身が自然と分離していませんから、交わるということばでさえ躊躇されます。だからこそ、子どもは草木に話しかけることもでき、小鳥や仔猫・仔犬みんなお友達ということになるのだと思うのです。

まい子ちゃんのお母様が、連絡帳に書きつけて下さったことを思い出しました。まい子ちゃんは四歳。ひとり遊びしていて、ふと、

〝わたし、なんだかさみしい。おそとにいってはしって来る〟

と言って、社宅の庭を一まわりして来るのだそうです。

そういえば、身体測定の時、はだかになったら、〝さみしい、さみしい〟といって、小さな腕を交叉させて、自分の小さな胸をいたわるようにしっかり抱いていたのも、まい子ちゃんでした。

秋のさびしさは、きっとこのまい子ちゃんに宿った動物的原体感にちがいないと思われるのです。他の季節にはない味わいを、子どもたちは名詞や形容詞的に覚えて行くのではありません。春は浅く、秋は深いといい、この逆を、まちがっても口にしないのも、それぞれ、私たちの体にしみこんだ感覚があるからではないでしょうか。春、夏、秋、冬、それぞれの日の光、湿度、気温、そしてその移り変わり

を、私ども人間の感覚の基調としているのだと思います。

誰かの詩に、錦秋の光の中に置かれた琴がひとりでに鳴り出すというのがありました。先生がいつか心の琴の音が鳴る子に育てよとおっしゃった意味が、漸くわかりかけて来たようです。

二

私どもの園では、よく散歩に参ります。少し園を離れると、まだ野山の繁みも、程よく子どもたちを迎え入れてくれるのです。

先週でした。いつもの道を通らずに、道のような道でないような小草をわけわけ進みました。方向を見失ってしまうほどのこともなかったのですが、子どもたちにしてみると、心細さが少々つのって来ていた頃合でした。たけひこ君が立ち止まって言いました。

〝先生、道がないよ〟

〝そうね……〟

私はたけひこ君に同調するように言って、彼の次のことばを待ったものですから、連れ立った子どもたちがみんな立ちすくんでしまいました。

行手が広がっておればまだましだったのでしょうが、古びた鉄のフェンスが葛や蔦にからまれて、行手を遮っているのです。

〝どうしよう……〟

子どもたちを追い込みすぎたかなとも思いましたが、もう一押し尋ねました。

たけひこ君は、私の顔をのぞきこむようにして口を開きました。

〝ぼくたち、死ぬかもしれないね〟

でも、私が驚いたのは、決して、その声が不安の極限でもなく、絶望の震えでもなく、むしろ、静かに澄んだ心境を淡々と伝えて来たからでした。

子どもというのは、どうして、こんな恐ろしいことばを平然と使えるのでしょう。

この答えは、この三日あとの大池公園の遠足のときに、たけひこ君自身が出してくれました。

〝このお山を越えたら、向こうが大池公園よ。も少し、も少し〟

といいながら歩きました。

隣りに手をつないでいたたけひこ君が、

〝先生、ぼくたち道を歩いているんだよね〟

というのです。〝そうよ。道を歩いているのよ。道ってなあに？〟この間のこともありましたから、たけひこ君に聞いてみたのです。

〝道っていうものは、つづいているもの〟

あまりにはっきりした答だったので、〝どこへ〟と愚問を発してしまいました。

〝道から道へ〟

私は返すことばもなく、この哲人の道行く姿に謙虚に従いました。

三

今日、私の大好きな星野君に、江の島のウミネコの話をしました。

「せんせいね、橋の所で、まだ、朝早かったから、誰もいなかったし、ウミネコの鳴きまねをしたの。ウミネコとお話したいなと思ったから。するとね、ウミネコが飛んで来て、

〝あなたはウミネコなの？〟

って先生に聞くの。先生はどうしてウミネコ語がわかるのか不思議だったんだけど、

〝わたしはウミネコじゃないわ。〟

とウミネコ語で答えたら、ウミネコが、

〝いいえ、あなたはきっとウミネコよ。本当はウミネコだったんだけれど、きっと魔法で人間にされているんだわ〟

って、そのウミネコが先生に言ったの。（わかる？これ全部、ウミネコ語で話しているのよ。）先生は今まで自分が絶対に人間だと思っていたから、ウミネコに会うまで、自分がウミネコだなんて考えてみたこともなかったんだけど、もしかして、本当に、私はウミネコかもしれないって感じたの。そうだ。きっと私はウミネコだ。だって、ウミネコ語もわかるし、ウミネコの鳴きまねしただけなのに、仲間が迎えに来てくれたんだものって思ったの。

〝先生はどうも人間じゃなくて、ウミネコらしいの〟

〝そういう気がするだけでしょ。もしかしてっていうことでしょ〟

〝ううん〟

〝じゃ、先生はウミネコにもどりたいわけ？〟

〝ね、星野君も、ウミネコになる？〟

〝みんなに会えなくなるんだもの、みんなと一緒なら、ボクも行く〟」

カワイ音楽教室研究会本部発行「あんさんぶる」（1982年12月号）より転載

（この原稿は横浜・希望ケ丘教会めぐみ幼児園、瀬底ノリ子氏の報告をもとにして上原輝男がまとめた。）